

# 神楽歌「明星」の解釈について——神楽歌「明星」を題材に詠まれた和歌から——

田林千尋

## 一、はじめに

宮廷における御神楽は、踐祚大嘗祭の清暑堂御神楽が成立した貞観元年（八五九）から内侍所御神楽が成立した一条天皇の御代、遅くとも寛弘二年（一〇〇五）まで約百三十一百五十年をかけて整備された。現在、平安時代の御神楽のまとまった古写譜本は、伝藤原道長筆『神楽和琴秘譜』（十世紀末—十一世紀初頭の写。以下、適宜「和琴秘譜」と称する。以下同）、伝源信義筆『神楽歌』（十一—十二世紀の写。以下、「信義本」）、八俣部重種注進『神楽歌』（十二世紀頃までの写。以下、「重種本」）、書写者不詳、鍋島家旧蔵『東遊歌神楽歌』（文治年間以前の成立。以下、「鍋島家本」）の四本が確認されている。御神楽が成立した時代のまとまった譜本は少なく、古写譜本のみを対象に詞章を解釈するには資料数の点から限界があると言わざるをえない。

そこで稿者はこれまで、平安中期頃の和歌集における歌謡同類歌の採録姿勢について述べ<sup>(一)</sup>、歌謡を題材に詠まれた和歌との関連から神楽歌の詞章の解釈を試みてきた<sup>(二)</sup>。歌謡と和歌は、音楽性をもなうか否かという大きな違いはあるものの、

本文そのものは同様に五七五七七の定型を持つものがある等、両者の親和性は明らかである。勅撰集や『古今和歌六帖』（以下、「六帖」）等の和歌集に歌謡の詞章が収められていることから、短歌体和歌の世界と歌謡の世界が接触し、一部では重なり合っていることは疑いえない。歌謡を題材に詠まれた和歌の解釈には歌謡の知識が欠かせず、また逆に、これらの和歌解釈等を歌謡の解釈に活かすことも可能だと考えられる。

そこで本稿では、平安期から『新古今和歌集』（以下、「新古今集」）までの和歌に題材として詠まれている曲として神楽歌「明星」を取り上げ、同曲を題材として詠まれた和歌から、当時の歌人たちに同曲がどのように解釈されていたか、そして、そこから同曲の詞章の解釈として何が指摘・確認できるかを検討する。

## 二、「明星」の曲と先学の解釈について

最初に、同曲の御神楽における位置づけと、先学の解釈について確認しておく。

「明星」の曲は、鍋島家本では「明星」の題が付されている

が、信義本と鍋島家本裏書の「或本」の次第では「吉々利々」、重種本では「星」の題を冠している（なお、和琴秘譜には当該曲が収められていない）。『梁塵愚案鈔』や『體源鈔』巻十ノ上所収の「北院御室御撰絲管抄」等に見える御神楽の次第でも「吉々利々（吉吉利利）」とされているところを見ると、「吉々利々」が本来の曲名かもしれない。歌謡の歌い出しが、その曲名になるのは、ごく一般的なことである。ただし、本稿では、新編日本古典文学全集42『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（以下、「新全集」<sup>(10)</sup>）、日本古典文学大系3『古代歌謡集』（以下、「旧大系」<sup>(11)</sup>）ほか、現在の注釈書の通行に倣い、当該曲を「明星」と呼ぶこととする。

さて、御神楽の曲を、神を御神楽の場に迎え、その依代となる神座を言祝ぐ「採物」、宴遊によつて神慮をなぐさめる「前張」、神を御神楽の場から返し、その名残を惜しむ「朝歌」の三つに分類した場合<sup>(12)</sup>、「明星」は「朝歌」の冒頭に位置する曲である。また、『梁塵愚案鈔』、『體源鈔』巻十ノ上所収の「北院御室御撰絲管抄」等では、「朝歌」にあたる「明星」の曲から終曲までを「星」の歌謡群としている。とくに、『梁塵愚案鈔』には「明星」の曲の注釈に「此下の三首は皆星の曲なり」とあり、「星」の歌謡群がもともとは「明星」、「得銭子」、「木綿作」の三曲であつたらしいことがわかる。

次に新全集からその詞章を挙げる（以下、引用本文における傍線・波線やゴシック体表記等は、強調のため私に付すものである）。

明星

本

きりきり 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や あか  
ぼしは 明星は くはや ここなりや 何しかも 今宵の  
月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや

末

白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や あかぼしは 明星は く  
はや ここなりや 何しかも 今宵の月の ただここに坐  
すや ただここに ただここに坐すや

本

白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や あかぼしは

末

明星は

本

あかぼしは

末

明星は

本

あかぼしは

末

明星は

きりきり 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や あか  
ぼしは 明星は くはや ここなりや 何しかも 今宵の  
月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや

末

白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や あかぼしは 明星は く  
はや ここなりや 何しかも 今宵の月の ただここに坐  
すや ただここに ただここに坐すや

右の通り、当該曲は本歌の詞章を繰り返し歌うものである。当該歌については、小西甚一が『梁塵秘抄口伝集』巻十四に

「**聴説**・朝清浄偈 唱時にやをつくる、是句にて星の一句根本なり」とあるのを紹介し、「清浄偈や」と続けるのでなく、いったん「清浄偈」で切り、あらためて「や」とはやしたもので「しい」と述べている<sup>(50)</sup>。つまり、当該曲の詞章は、先の傍線部「きりきり 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈」と波線部「あかぼしは 明星は くはや ここなりや 何しかも 今宵の月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや」に大きく別れるのである。本稿ではとくに後半（波線部）の解釈に焦点を当てるが、それに先だつて前半「きりきり 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈」の解釈から確認しておく。

まず、「きりきり」については、本来「吉々利々」という表記である。これは各本異同がない。これを「吉利吉利」と訓むべきであるという指摘は賀茂真淵『神遊考』によって最初になされ、以後、「きりきり」と訓むのが通説となつてゐる。意味については、三浦佑之氏が「めでたい」という意味の漢語「吉利」が漢籍に見られることを指摘し、「吉利吉利」は、寿言として発せられる祝誦句であり、「神楽歌の詞句となつた初期の段階では「キツリキツリ」と誦されていたはずである」と述べている<sup>(51)</sup>。また、氏は、「吉利吉利」は「千歳栄」と合わせて独立句的性格を持ち、第三句以下とは区別すべきことを指摘、「めでたいめでたい、千年のお栄えあれ」という内容であると解釈している<sup>(52)</sup>。

次に「白衆等 聴説晨朝 清浄偈」については、法華懺法の六時讚の晨朝偈に類似句があることが、『梁塵愚案鈔』から既に指摘されている。これらの句について三浦氏は、「あかぼしは」以下の主題部を導く序的なことばとして、宮中でしばしば

耳にする『法華懺法』から、明星の時刻を示す「晨朝（寅朝）」という語をもった一句が取り出され、結合されて「いったと述べている<sup>(53)</sup>。いずれも首肯できる説である。

さて、以上を確認したうえで、詞章の後半（波線部）に目を向ける。三浦氏の述べるように、前半（傍線部）の漢語句によつて後半部「あかぼしは 明星は くはや ここなりや 何しかも 今宵の月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや」が導かれるのだとすれば、この箇所こそ当該曲の中心があると考えられる。それは、当該曲の曲名が歌い出しの「吉々利々」だけでなく、「星」や「明星」とされることがあることから推察される。そして、この箇所解釈の中心となるのは、「あかぼし」（本稿では現行の通釈書に倣い、「あかほし」ではなく、「あかぼし」と表記する）の語と「今宵の月」の語の指すもの、そして両者の位置関係についてである。

「あかぼし」については、『倭名類聚抄』（二十卷本）に「兼名苑云歳星一名明星此間云<sup>佛中之</sup>類聚名義抄」（佛中四十四ウ）に、「歳星<sup>アカホシ</sup>」とあり、「あかぼし」は「歳星」すなわち「木星」を指すとされている。なお、『類聚名義抄』には、「明星<sup>ミカホシ</sup>」（佛中四十四ウ）とも見える。神楽歌「明星」の詞章では「あかぼしは 明星は」と重ねて歌われており、これらの二句について『梁塵愚案鈔』が「同事を音訓重ねいへり」と指摘して以来、「あかぼし」＝「明星」であると理解されてきた。この点、稿者も異論はない。先述の通り、当該曲は夜通し歌われた御神楽の終演部「朝歌」に属しており、本来は夜が明ける段になつて歌われたものと推察できる。そして、これも先に述べた通り、この語を導く漢語句には、「明星の時刻を示す「晨朝（寅朝）」

という語」が含まれている。以上から、当該曲における「あかぼし」は、明けの明星であるとの通説に従ってよいだろう。なお、近代に入ってからこの「明けの明星」を金星に限定する説がほとんどだが<sup>(4)</sup>、先に述べたように、古くは「あかぼし」は木星を指すという説もある。あえてどの天体かを限定する必要はなく、広く明け方の空に輝く星を指すと考えるのが穏当である。

次に、「今宵の月」についてであるが、当該語句の解釈については、新全集脚注における臼田甚五郎の考察が詳しい。長くなるが、全文を引く。

この歌では「今宵の月」のあり方が問題である。『梁塵愚案抄』は「今宵の月は明星のいつる時は有明の月の事なり」として、明けの明星と有明の月とが一つ空に輝いている興味を感じている。『神楽歌入文』はその感興をもう少し細やかに、「彼の明星の出でて夜は既に明けたるに、何しかもこよひの月は、只此処に坐すやと、月の在る処を指してことは云ふなり」と述べている。ところが、『梁塵後抄』が「明星の月よりけに照りかかやくをまことの月にやとうたがひて、何しに今夜あるべくもあらぬ月のここにいますやといふ意なり」と異なつた見解を出した。明星が月のように照り輝くとするこの説は、いかに文学的虚構ありとはいへ、表現不十分で無理である。「只神楽の時期が霜月の中頃として、一夜照り渡つた月が西の山の端に光り納める頃とすれば、前者（東に明けの明星、西に月と相対している）とみる説をさす」で

よい様に思う」とする西角井説<sup>(5)</sup>が妥当な見解である  
十一〇。

また、小西甚一は旧大系の頭注で次のように述べた。

神楽は、夕方から始まり、徹夜でとりおこなつてゆき、このあたりからそろそろ夜が明けてくる。そこで、暁に縁のある歌が出されるわけである。あけの明星が空に輝き、残月もまだうすく消え残る景色と見てよい。後抄は、実際には月がないものとし、明星が月よりもあざやかに輝くのを、月かしらと疑つて「何しに今夜あるべくもあらぬ月のここにいますや」とうたつた意だとする。これは、神楽の時節により、どうにでも動くのであつて、定例の十一月中旬なら前の解釈があてはまるし、月末なら後の解釈が適当である。その「場」によつて解釈が幾様にもなるのは、歌謡の特性である<sup>(6)</sup>。

なお、ここに挙げられていないが、『體源抄』十ノ上には「星ニハ仰テ月ヲミルヤウヲマフ也。是今夜ノ月モ只コ、ニマシマストイフ詞ヲ作ナリ」とある。賀茂真淵は『神遊考』において、「暁に成て、明星の西の天にきらめくに、月も同じそらにすみていますを、いかで月星のかく同じあたりに照ますといへり。かく見ずは上の晨朝の言につゞくべからず」と述べ、本居大平は『神楽歌新釈』の中で、「明星のころなれば有明の月にて、たゞこゝにますとは、月は暁方には西の方にあるを見なれたるころに、有明の月の天の最中か又は東方にあるをば、かく打

思ふがまゝにいへるさまなり」と述べている。いずれも御神樂の場において、明星とともに月が空に出ていゝさまを歌つたものと解釈していることがわかる。

近代に入つてからも、「明星最早いでたるに何故に月は天上にのこれるかと似合はしからぬことを怪みし詞なり」（千秋季隆<sup>(十四)</sup>）、「明の明星が出て夜は已に明け放たれたのに何故に月は只此処に残つてゐるかの意。こゝとは月のある処をさしていふ」（大竹貞治<sup>(十五)</sup>）、「明けの明星が輝いているのに、まだ月が出ていゝことへの注意」（池田弥三郎<sup>(十六)</sup>）と、この説はぶれない。

このように、当該曲の「今宵の月」は実際に御神樂の場に出ている有明の月を指し、当該曲の後半（波線部）の詞章は空に明けの明星と月が出ていゝさまを歌つていゝとするのが通説である。稿者もこれに異論はない。このように空に月と星が出ていゝさまを歌う表現は、当時の和歌にも散見される<sup>(十七)</sup>。

以上の説をまとめた現在の通行の解釈として、新全集による本歌の解釈を挙げる。

めでたい、めでたい、千歳にわたつて栄えあれ。「白衆等 聴説晨朝 清浄偈」、ヤ、夜明けに輝く明星は、明星は、こりや、もうここに出ていゝよ。それなのになんだつてまあ、今宵の月が、ちよつとここに出ておられるのか、ちよつとここに、ちよつとここに出ておられるのか<sup>(十八)</sup>。

なお、池田弥三郎は、このような明けの明星と有明の月との

情景を歌う理由を、「暁の別れに對する名残惜しい気持ちを示している<sup>(十九)</sup>」と解釈している。これについては後述したい。

以上について、新全集や大系等、現在の注釈書の問題点を挙げるとすれば、神樂歌「明星」の曲の題名は本来「吉々利々」であろうが、これについての言及がない点、また、第一句「きりきり」は漢語であることから「吉々利々」と表記すべきところを「きりきり」とひらがなで表記している点である。

### 三、神樂歌「明星」を題材とする和歌について

さて、冒頭に述べたように、神樂歌「明星」については、同歌を題材として詠んだ和歌が散見される<sup>(二十)</sup>。

そこで本章では、御神樂が成立した平安期の和歌において、神樂歌「明星」がどのように和歌に詠み込まれていゝか、また、当時の歌人には神樂歌「明星」の詞章がいかに解釈されていたかについて検討を加える。

対象にする和歌は、私に下限を『新古今和歌集』までとした。神樂歌「明星」・「吉利吉利」・「星」の題や詞章の各句を詠み込む例のほか、御神樂の場における「星（ほし）」・「明星」・「あかぼし」を詠んでいゝと見られる和歌を広く検索し、これらの和歌の歌題と表現に注目する。

神樂歌「明星」の詞章を詠み込む和歌の例は時代が下るため、まずは「星（ほし）」・「明星」・「あかぼし」の語を詠む和歌から順に見ていく。

三一、「萬葉集」から平安中期頃までの和歌に見る

「星(ほし)・「明星」・「あかぼし」の語

『新古今和歌集』までの和歌で、「星(ほし)」の語を詠むものは延べ数でおよそ四七〇首に及ぶ<sup>(二七)</sup>。しかし、歌題としては六帖第一帖天部、『永久百首』の雑三十首、『教長集』雑歌、『百詠和歌』第一天象部に見えるのみで、勅撰集には見られない。また、新古今集までの和歌で、「明星」・「あかぼし」の語を詠む和歌は、二十三首(重複歌四例を除く)である<sup>(二八)</sup>。さて、和歌における「明星」の語の初出は次の萬葉歌である。

九〇四

世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は なにせむ  
に 我が中の 生まれ出でたる 白玉の 我が子古  
日は 明星の 明くる朝は きたへの 床の辺去  
らず 立てれども 居れども 共に戯れ 夕星の  
夕になれば いざ寝よと 手を携はり 父母も う  
へはなさがり さきくさの 中にを寝むと 愛しく  
しが語らへば いつしかも 人となり出でて 悪  
しげくも 良げくも見むと 大船の 思ひ頼むに  
思はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ来ぬれば  
せむすべの たどきを知らに 白たへの たすき  
を掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞  
ひ捧み 国つ神 伏して額つき かからずも かか  
りも 神のまにまに 立ちあざり 我乞ひ捧めど  
しましくも 良げくはなしに やくやくに かたち  
つくほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる

命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸  
打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ 世の中の  
道

(萬葉集 卷第五 雑歌 恋「男子名古日」歌三首  
長一首 短二首)

当該歌では「明星」の句が「明くる朝は」を導くことから、「明星」は「あかぼし」と訓む可能性が高い。だが、原表記は「明星之」であり、確かなことはいえない。いずれにせよ、当該歌は御神楽とは関連しない。

「あかぼし」の例は、平安中期の六帖まで下る。

三七五

月影にはがくれにけりあかほしのあかぬ心に出でて  
くやくしく (古今和歌六帖 第一帖 天部 ほし)

当該歌の「あかぼし」の語については、神楽歌に典拠があるとする近藤みゆき氏の指摘がある<sup>(二九)</sup>。六帖の成立時期は『後撰和歌集』以後、『拾遺和歌集』までと目され<sup>(三〇)</sup>、内侍所御神楽が成立した時期と一部重なっている。したがって、当時、神楽歌「明星」の曲を典拠とする和歌が詠まれ、六帖に採取された可能性は否定できない。しかし、歌題や内容、表現からは、当該歌が御神楽に関連する和歌であるとの確証は得られないため、この点については保留したい。後述するが、神楽歌の譜本や有職書、日記の記録等に「明星」の曲名が記され、和歌の題材として同曲が盛んに詠まれるようになるのは、六帖成立から百年近く後のことである。当該歌の「あかぼし」の語が神楽歌

「明星」によるものだとすれば、当該歌は神楽歌「明星」を典拠に詠まれた和歌として飛び抜けて早い例ということになる。

なお、これ以降も『賀茂保憲女集』（正暦四年（九九三）頃か）に一首<sup>二一五</sup>、『為忠家初度百首』（長承三年（一一三四）末頃成立）では「暁更照射」の題で二首<sup>二一六</sup>、『為忠家後度百首』（保延元年（一一三五）頃）では「暁郭公」の題で一首<sup>二一七</sup>、「あかぼし」の語が詠まれているが、その後は御神楽に関連する和歌に集中的に見られるようになる。

### 三一―二 神楽歌「明星」を題材に詠まれた和歌

さて、御神楽の場における「星（ほし）・「明星」・「あかぼし」を詠んだ和歌は、『堀河百首』に収められている次の歌が初例である。

一〇二 暁のほしさへさえぬ神ばの霜うちはらふ袖のかざふ  
り (堀河百首 冬十五首 神楽 大江匡房)

当該歌には「あかぼし」の語はないが、「神楽」の題で詠まれていること、御神楽の場の「暁のほし」を詠んでいること、さらに「暁のほし」という表現からこの「ほし」が明星を指しているといえること等を合わせると、詠作の背景には神楽歌「明星」が意識されたと考えられる。『堀河百首』は長治二、三年（一一〇五、六）頃の詠進なので、神楽歌「明星」が題材に和歌が詠まれるようになったのは、院政期に入ってからということになる。

次に、この後、新古今集までに見られる、神楽歌「明星」の詞章を典拠とする和歌や、御神楽の場における「星（ほし）・「明星」・「あかぼし」を詠んだ和歌等、神楽歌「明星」を題材に詠まれたと考えられる和歌を、歌集の成立年代順に列挙する<sup>二一八</sup>。

五三 いろいろよりくまなきそらにむかひみてこよひの月と  
ほしうたふなり

(為忠家初度百首 冬 月前神楽 藤原為忠)

六一 やみのうちにきてをかけし神あそびあかほしより  
や明けはじめけん (久安百首 神祇 崇徳院)

三三 あかほしのあかで出でにしあかつきはこよひの月に  
おもひいでずや

(実国集 八月の中の十日に神楽をし侍りていとな  
ごりおほかりしに、なが月の十日あまりにかくな  
ん申しおこせたりし 隆信朝臣)

三三 ただここにただ爰にとぞおもひしに出でし八月のか  
ひもなかりき (実国集 返し)

三三 さよふかきにはびのかげのくまなきはまちとるほし  
のひかりなるべし (寂連無題百首)

一五三 めづらしなあさくら山の雲井よりしたひ出でたるあ

かほしのかげ

(山家集 下 雑 神祇十首神楽二首)

神楽 藤原定家)

二六五 神代よりながく雲井にますかがみ光をかはすあかほしのこゑ

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 九条兼実)

二六五 君がため玉ぐしのはをとりかざし星さゆるまでうたひ明さん (林葉和歌集 第四 冬歌 神楽<sup>歌林苑</sup>)

二六六 雲のうへに神もこころや晴れぬらん月さゆる夜のおかほしのこゑ

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 藤原良経)

三〇〇 あかほしのかげ見えそむる山のはに月の名残をしやしみるかな (正治後度百首 暁 源具親)

二六九 こゑさゆる星にひかりやまさるらんもしきてらすやたのかがみは

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 藤原季経)

三六九 影はれし昔もかくとみゆるかな雲ゐの月にあか星のこゑ (正治後度百首 公事 源具親)

二七〇 ますかがみひかりをそふる雲のうへにほしさえわたるこゑきこゆなり

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 藤原隆信)

九二二 あかほしの雲ゐにすめるこゑにてぞあまのとあけし昔をばしる (正治後度百首 くうじ 越前)

二七一 そらさえてまた霜さゆる明がたにあかほしうたふ雲のうへ人

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 藤原隆信)

二六三 聞く人の心もそらに寒えにけりほしうたふなる雪の明ぼの (石清水若宮歌合 (正治二年) 雪 卅三番 左 讚岐)

二七二

一九六六 そのかみやあまのいはとのあけしよもおもひしらるるあかほしのこゑ

一九九 (千五百番歌合 冬三 九百九十四番 左 藤原公継)  
そのかみのいはともかくやあかほしのあけゆくそら  
に鳥うたふなり

(千五百番歌合 冬三 九百九十六番 左 藤原季能)

二〇四 あまのとのあけやしぬらんうばたまのふけゆくそら  
にあかほしのごゑ

(千五百番歌合 冬三 千三十三番 左 藤原良平)

二〇六 ここにみる月には猶やまさるらんあかほしきゆる明  
方の空

(元久元年版隆信朝臣集 雑一 ないし所のみかぐ  
らのひやうしとりて、暁かへりたりしに、たんど  
のごがもとより)

二〇七 あかほしにこよひの月の影そへて心もはるるあけが  
たの空 (元久元年版隆信朝臣集 雑一 かへし)

二〇八 くもりなく雲のよそにもききしかなすみのぼりける  
あかほしのごゑ

(元久元年版隆信朝臣集 雑一 按察入道資賢のも  
とより、よべのみかぐらあやまりなくつとめとほ  
し給へるよし、つたへうけ給ふなん、いといとよ  
ろこび申して)

二〇九 つたへきく君なかりせば雲の上にすむかひあらじあ

### か星のごゑ

(元久元年版隆信朝臣集 雑一 かへし)

次にこれらの二十六首について、歌題と表現の点から詳細に  
見ていくこととする。

### 三一三、神楽歌「明星」を題材とする

和歌の歌題について

まず、神楽歌「明星」を題材とする和歌二十六首の歌題につ  
いて触れておきたい。

神楽歌「明星」を題材とする和歌の歌題は、「神楽」が八首  
ないが、『実国集』や元久元年(一一〇四)版『隆信朝臣集』(自  
撰。以下、「隆信集」と表記する際はこの本を指す)の隆信歌  
とその「返し」についても、詞書に「神楽をし侍りて」(『実国  
集』二二、二三番歌)、「ないし所のみかぐらのひやうしとりて」  
(隆信集八二六、八二七番歌)、「よべのみかぐらあやまりなく  
つとめとほし給へる」(隆信集八三〇、八三二番歌)等とあり、  
やはり神楽に関連して詠まれている和歌であることがわかる。  
神楽歌「明星」を題材とする和歌の題で、「神楽」に次いで  
多いのは、七首を数える「冬」である(「神楽」との重複三首)。  
これは、踐祚大嘗祭の清暑堂の御神楽(十一月)や賀茂臨時祭  
の還立御神楽(十一月下旬〜十二月上旬)、内侍所御神楽(十  
二月中旬)等、宮廷御神楽の中心になる御神楽をはじめ、多く  
の神楽が冬に行われたためと考えられる。

また、『久安百首』の八一番歌の題「神祇」も当該歌が神楽を詠んでいることを示唆しており、同様に『正治後度百首』の三八九、五九五、九九二番歌の題「公事（くうじ）」も、これらが宮中行事としての御神楽を詠んでいることを示している。そもそも神楽歌を題材とする和歌を検討の対象にしているのだから、それに関連した歌題や詞書が多いのは当然だろう。

一方、『石清水若宮歌合』（正治二年（一一〇〇））の二六三番歌、

三三 聞く人の心もそらに寒えにけりほしうたふなる雪の  
明ぼの

（石清水若宮歌合（正治二年）雪卅三番 左讃岐）

は、「雪」の題で詠まれている点で例外的である。

当該歌は「ほしうたふ」、「明ぼの」等の語から「明星」の曲を題材にしていることはあきらかである。また、「石清水若宮歌合」という詠作の場からも、「雪の明ぼの」とはおそらく神楽の行われた明朝の「明ぼの」を指しているのだろうと想像される。だが、この歌合の判者であった源通親は、当該歌について、判詞で「左、ほしうたふなると侍るや、神楽の歌めかしくきこゆらん」と難じている。「明星」の曲を典拠に詠む歌は「神楽」の題にこそふさわしく、「雪」という題からは外れているという当時の歌人たちの認識が見て取れる。

同様の例として次のような和歌も挙げられる。

三七〇 あかほしのかげ見えそむる山のはに月の名残をし

しみるかな  
（正治後度百首 晧 源具親）

当該歌も、「晧」という題ではあるものの、「あかほし」や「月」の語、同じ明け方の空に明星と月が出ているという表現や、夜の名残を惜しむ表現等に、神楽歌「明星」の詞章の影響がうかがえる。だが、当該歌の中に御神楽の場と直接関連する語や表現は見られない。当該歌もおそらくは御神楽の明くる朝の「晧」を詠んだ歌であろうという解釈は、想像の域を出ない。

このように、「神楽」や「冬」、「神祇」や「公事」といった神楽に関連する歌題以外で、神楽歌「明星」を典拠とする和歌が詠まれる例がわずかながらも見られる。これは、神楽歌「明星」を典拠とする和歌に用いられた語や表現が、和歌表現として定着しつつあったためとも考えられる。一方で、これらは厳密には、神楽歌「明星」を題材にしているとはいえないかもしれない。また、新古今集以後も、神楽歌「明星」を題材とする和歌の歌題は、神楽に関連するものが多い。

さて、歌題の点で特に注目されるのは、『文治六年女御入内和歌』（一一九〇年成立）の「入内屏風和歌」（以下、「入内屏風和歌」）において、月次屏風に描かれた神楽の絵にあてて、「十二月」の「神楽」題で五首が詠まれていることである<sup>二十九</sup>。

入内屏風和歌のいう「十二月」の「神楽」とは、すなわち十二月中旬に行われた内侍所御神楽である。実際、同歌集の二六八番歌は、良経の私家集『秋篠月清集』祝部「女御入内月次御屏風の中」に、第十二帖「内侍所御神楽」の題で収められている（一三七二番歌）。また同様に、二七一番歌は、定家の私家集

『拾遺愚草』中巻「女御入内屏風歌」に、「十二月」の「内侍

所御神楽儀式」の題で収められている（一九一二番歌）。神楽歌「明星」を題材とする和歌で、このように特定の御神楽を指す歌題は、内侍所御神楽のほかには管見に入っていない。

以上、神楽歌「明星」を題材にする和歌の歌題からは、次のような点が指摘される。

①神楽歌「明星」を題材とする和歌の歌題は「神楽」が八首と最も多く、次いで「冬」の七首である。「冬」の題でこれらの和歌が詠まれるのは、宮廷御神楽の中心になる御神楽をはじめ、多くの神楽が冬に行われたためだと考えられる。

②また、神楽歌「明星」を題材とする和歌には、とくに内侍所御神楽での同曲を詠んでいるものが見られる。神楽歌「明星」を題材とする和歌で、このように特定の御神楽を指す歌題は、内侍所御神楽以外見られない。

#### 三―四、神楽歌「明星」を題材とする和歌の表現について

次に、これらの和歌の表現に目を向ける。

神楽歌「明星」を題材とする和歌二十五首のうち、八首に「明星の声」という表現が見られる。また、「声」、「うたふ」という語を含む例は十六首に上り、これらの歌唱に関する語を詠みこむことが、神楽歌「明星」を題材とする和歌の典型的な表現の一つであるといえる。

また、「影はれし昔もかくと（『正治後度百首』三八九番歌）」、「あま明けそめしあまのいはとの昔より（同五九五番歌）」、「あま

のとあけし昔をばしる（同九九二番歌）」、「そのかみやあまのいはとのあけしよもおもひしらるる（『千五百番歌合』一九八六番歌）」、「そのかみのいはともかくや（同一九九〇番歌）」、「あまのとのあけやしぬらん（同二〇六四番歌）」のように、天の岩戸伝説を引く例もまとまって見られる。これらの和歌の成立とほぼ同時代、『梁塵秘抄口伝集』第一に「かぐらは天照おほん神の、天の岩戸をし開かせたまひける代に始まり」と記されたように、当時天の岩戸の前でのアマノウズメの舞は神楽の起源と考えられていた。その結果が天照大神の出現、すなわち太陽の復活であることと、和歌の題材となっている神楽歌「明星」が、夜通し行われた御神楽の終盤、明け方の太陽が出る前頃に歌われたこと等が関係して、このような表現が定着したと考えられる。

さて、表現の面においてもつとも注目したいのは、これらの二十五首の中に神楽歌「明星」の詞章に直接典拠を持つことばを詠むものがあることである。

『為忠家初度百首』の藤原為忠の歌、

五三 いづるよりくまなきそらにむかひみてこよひの月と

ほしうたふなり（冬 月前神楽 藤原為忠）

では、「ほし」の曲の詞章として「こよひの月」の語が直接引用されている。これが神楽歌「明星」の詞章「何しかも 今宵の月の ただここに坐すや」の「今宵の月」であることは言うまでもない。

また、藤原隆信とその周辺にも、神楽歌「明星」の詞章を典

扱とする和歌が見られる。『美国集』二二、二三番歌も含め、ここでは詞書が最も詳細な隆信集から引用する。

大納言美国左衛門督と申しし時、いざなはれしかば、白河なる所にて、かぐらうたひあそびし程に、暁がたに、ほしになりて、こよひの月はただここにますなどうたひし程に、おもしうかりしなごり、あかずおぼえて帰りにしち、ふつか三日有りて、月

あかかりし夜申しおくりし

五九 あかほしのあかで出でにし暁はこよひの月に思ひいでずや  
かへし

五八 ただここにただここにこそ思ひしを出でしは月のかひもなかりき  
かへし

ないし所のみかくらのひやうしとりて、暁かへりたりしに、たんこのごがもとより

六六 ここにみる月には猶やまさるらんあかほしさゆる明方の空  
かへし

六七 あかほしにこよひの月の影そへて心もはるるあけがたの空  
(元久元年版隆信集 雑一)

右の隆信(七九〇番歌)と美国(七九一番歌)は『美国集』

二二、二三番歌と同歌である。これらの贈答歌に関しては、詞

書から「ほし」の曲になって、「こよひの月はただここにます」などと歌った後、それを思い返してのやりとりであることがわかる。また、八二七番歌もやはり、「ないし所のみかくらのひやうし」を取った明朝の贈答歌であることが詞書からうかがえる。これらの和歌に見られる「こよひの月」や「ただここにただここに」の語は、神楽歌「明星」の詞章の「何しかも今宵の月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや」から引かれているのがあきらかである。とすれば、八二七番歌の「月」も、当然同詞章の「今宵の月」を念頭において詠まれたものだろう。これは入内屏風和歌二六八番歌、『正治後度百首』の三七〇、三八九番歌の「月」まで広げて考えることができる。

また、入内屏風和歌の次の三首に詠まれた「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語についても同様のことがいえる。

六五 神代よりながく雲井にますかがみ光をかはすあかほしのこゑ

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月 神楽 九条兼実)

六六 こゑさゆる星にひかりやまさるらんもしきてらすやたのかがみは

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月 神楽 藤原季経)

六七 ますかがみひかりをそふる雲のうへにほしさえわた

るこゑきこゆなり

(文治六年女御入内和歌 入内屏風和歌 十二月)

神楽 藤原隆信)

和歌において、月を「ますかがみ(まさかがみ・ますみのかがみ)」の語で表す例は萬葉集の時代から見られ、一般的な表現といえる。しかし、「やたのかがみ」の語は、和歌ではこれが初出であり、この後、江戸時代までの作例を含めても四例(重出例を除く)しか見られない。歌語としては奇観の語である。

さらに「やたのかがみ」の語で月を表す例は、当該歌を除くと

『宝治百首』宝治二年(三四八)の一首のみである<sup>三十七</sup>。また、

星と天体の月を一首に詠む和歌は新古今集までで四十二首(重出例を除く)あり、そのうち十首が神楽歌「明星」を題材とする和歌であるが、月を「月(つき)」以外の語で表現するのは、三十八首中入内屏風和歌の二六五、二六九、二七〇番歌のみである。

では、兼実、季経、隆信の三人が、神楽歌「明星」を題材とする和歌の中で、月を表す語として「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語を用いたのはなぜか。「ますかがみ」はともかく、「やたのかがみ」という、歌語としては奇観の語をあえて用いた季経には、何らかの意図があったのではないだろうか。

ここでは、これらの和歌が「十二月」の「神楽」、すなわち内侍所御神楽を詠んだものであることから、同神楽の祭祀の対象に注目したい。『江家次第』の「内侍所御神楽事」の条の冒頭には、内侍所御神楽の起源について次のような記述がある。

内侍所者神鏡也、元与主上御同殿、故院被仰云、帝王冠巾子左右有穴、是内侍所御同殿之時、主上夜不能放冠給、御眠之時御冠屢落、仍以挿頭華、自巾子穴通御警也、垂仁天皇世始御別殿、故院被仰云、内侍所神鏡、昔飛上欲上天、女白河院(後書)官懸唐衣奉引留、依此縁女官所奉守護也、天徳焼亡、飛出著南殿前棧、小野宮大臣称警、神鏡下入其袖、寛弘焼亡始焼給、雖陰円規不闕、諸道進勸文、被立伊勢公卿勳使、(行成)宸筆宣命始於此、長久焼亡消失、件夜以少納言信為使奉出、女官誤先出太刀、次欲出神鏡之处、火已盛不可救、後朝灰有光、集之入唐櫃、自一院院御時始

内侍所御神楽の祭祀の対象は、内侍所に祀られていた「神鏡」すなわち三種の神器の一つ、八咫鏡なのである。兼実、季経、隆信の三人が、月を表すのに「ますかがみ」、「やたのかがみ」という語を用いたのはこのためだと考えられる。『江家次第』の成立から『文治六年女御入内和歌』まではおよそ八十年の開きがあるが、『平家物語』や『太平記』、『日葡辞書』といった中世の書にも「内侍所(ないしどころ)」の語で八咫鏡を指す記述が見られるので<sup>三十一</sup>、文治六年時点でも同様の理解があったと見てよいだろう。

さて、神楽歌「明星」を題材に詠まれた和歌の「ほし」「あかぼし」は、空に輝く天体としての明けの明星を指すもの、神楽歌「明星」の曲あるいは「星」の歌謡群を指すもの、そして、両者を指すものがある。

これに対して、月はというと、隆信集八二七番歌や入内屏風和歌の二六五、二六八、二六九、二七〇番歌、正治後度百首の三七〇番歌等から、これらに詠まれた月はいずれも御神楽の場の空に出ている月を指しているといえる。また、「月と明星とが光を交わす(隆信集八二七番歌・入内和歌二六五番歌)」、「月の光は星よりも明るいだろうか(入内和歌二六九番歌)」といった表現からは、月と明星は同じ空に出ているものと解釈できる。つまり、これらの和歌を詠んだ歌人たちは、神楽歌「明星」の詞章にある「今宵の月」は御神楽の夜、明け方の空に見られる月であり、神楽歌「明星」の「あかぼしは 明星は くはやここなりや 何しかも 今宵の月の ただここに坐すや ただここに ただここに坐すや」は、月と明星とが明け方の空に同時に出ているさまを歌っていると解釈していたということである。このような同時代の歌人たちの解釈は、先学の神楽歌「明星」解釈の通説を裏付ける証左になるだろう。

また、隆信集七九〇、七九一 番歌の詞書には、「暁がたに、ほしになりて、こよひの月はただここにますなどうたひし程に、おもしるかりしなごり、あかずおぼえて帰りにしのをち」と、朝歌の「明星」を歌いながらも夜通しの神楽の名残を惜しむ心情が明記されている。これに続く隆信集の隆信歌(七九〇番歌)は、「また(御神楽に) 飽き足らないうちに「明星」の歌になり、空に明星が出てしまったあの日の明け方が、御神楽の詞章の「今宵の月」ではありませんが、今夜の月に思い出されませんか」という内容で、これに対する実国の返歌(七九一 番歌)は、「(御神楽の歌詞のように、今宵の) 月が「ただここに、ただここに」と歌い、月が「ただここに、ただここに」(まだ出

ていまずから夜は明けないはずだ) 思っていたのに、「(明星)の歌になり、空に明星が) 出てしまったのは、どうしようもなく、つまらないことでしたよ」と解釈できる。これらの贈答歌からも、やはり神楽の名残を惜しむ心情が読み取れる。

神楽歌「明星」の詞章は、新全集の訳によると「夜明けに輝く明星は、明星は、こりや、もうここに出ているよ。それなのになんだつてまあ、今宵の月が、ちよつとここに出ておられるのか、ちよつとここに、ちよつとここに出ておられるのか<sup>三十三</sup>」という意味で、朝になっても消え残る月の存在を疑問視しているようにも見える。しかし、そこに込められているのはむしろ池田弥三郎が指摘するように<sup>三十三</sup>、空に月が残っているのだからまだ夜は明けない、御神楽もまだ終わらないのだという、御神楽の名残を惜しむ気持ちであるということが、隆信集七九〇、七九一 番歌から確認できる。

以上、神楽歌「明星」を題材にする和歌の表現について検討した。次に確認と指摘をまとめる。

① 神楽歌「明星」を題材にする和歌の定型表現として、「声」や「うたふ」といった歌唱に関する語を詠みこむこと、また、御神楽の起源とされた天の岩戸伝説を引くことが指摘できる。

② また、神楽歌「明星」を題材にする和歌には、「今宵の月」や「ただここに」等、神楽歌「明星」の詞章から直接ことばを引く例がある。また、「月」や、「ますかがみ」、「やたのかがみ」といった月を表す語も、神楽歌「明星」の詞章の「今宵の月」を指していると考えられる。

③ さらに、『文治六年女御入内和歌』の入内屏風和歌にお

いて、兼実、季経、隆信の三歌人が、内侍所御神楽について詠んだ和歌で、月を表すのに「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語を用いた背景には、内侍所御神楽の祭祀の対象が八咫鏡であるという理解があったためと考えられる。

④隆信集所収歌や女御入内和歌所収歌等から、当時の歌人は、神楽歌「明星」は月と明星とが明け方の空に同時に出ているさまを歌っていると解釈していたことがわかる。また、隆信集七九〇、七九一番歌やその詞書からは、神楽歌「明星」の詞章には御神楽の名残を惜しむ気持ちが入り込められているという当時の解釈が読み取れる。

### 三一五、まとめ

以上、神楽歌「明星」を題材にする和歌について、歌題と表現の両面から考察した。

まず、神楽歌「明星」を題材とする和歌の歌題は「神楽」、次いで「冬」が多いことがわかった。「冬」の題でこれらの和歌が詠まれるのは、宮廷御神楽の中心になる踐祚大嘗祭の清暑堂御神楽や賀茂臨時祭の還立の御神楽、内侍所御神楽等の御神楽をはじめ、多くの神楽が冬に行われたためと考えられる。また、これらの和歌の中には、とくに内侍所御神楽での同曲を詠んでいる例が複数見られること、このように特定の御神楽を指す題は内侍所御神楽以外に見られないことを指摘した。

周知の通り、冬に行われる神楽は内侍所御神楽だけではない。そのため、「冬」の題で神楽歌「明星」を題材とする和歌が詠

まれていても、即それが内侍所御神楽の同曲を指しているとは言いきれない。

しかし、『江家次第』では、「明星」を含む「星」の歌群は、二種類記された内侍所御神楽の次第の一方にのみその名が見え、踐祚大嘗祭の清暑堂御神楽や賀茂臨時祭の還立の御神楽、石清水八幡宮の社頭の御神楽等の条には見られないことが、土橋寛によって指摘されている<sup>三十四</sup>。さらに、『中右記』には、内侍所御神楽での「星」について次のような記述がある。

晩頭参内、今夕内侍所御神楽也、(中略) 人長右近衛府生  
秦兼方有指仰、令歌星、于時天晴月明、歌笛之声自感歎者  
也。  
(嘉保二年十二月八日)

今夕有内侍所御神楽、(中略) 取物前張之後有仰歌星、誠  
以幽妙也、每歌被立人長、舞体尤絶妙也

(承德二年十二月二日)

このような特定の曲に対する賛美は、他の御神楽や、内侍所御神楽の他の曲については管見に入っていない<sup>三十五</sup>。

これらの資料や、同時代の神楽歌「明星」を題材に詠まれた和歌の中にとくに内侍所御神楽での同曲を詠んでいる例が複数見られること、このように特定の御神楽を指す題は内侍所御神楽以外に見られないこと等を考え合わせると、平安後期から末期にかけて、貴族の間では、「明星」の曲は内侍所御神楽と関係の深い曲として認識されていた可能性がうかがえる。「冬」の題の下で詠まれた神楽歌「明星」を題材とする和歌も、ある

いは内侍所御神楽の同曲を題材に詠んだものかもしれない。ただし、一方で、この時代、宮廷の神楽といえはまず内侍所御神楽であったことも確かである。よって、これらの可能性については臆測の域を出ない。

また、神楽歌「明星」を題材とする和歌の表現面からは、これらの和歌の定型表現の一つとして、「声」や「うたふ」といった歌唱に関する語を詠むことや、天の岩戸伝説を引くことが確認できた。さらに、神楽歌「明星」を題材にする和歌には、「今宵の月」や「ただここに」等、神楽歌の詞章から直接ことばを引く例があること、「月」や、「ますかがみ」、「やたのかがみ」といった月を表す語も、神楽歌「明星」の詞章の「今宵の月」を指していると考えられることを指摘した。特に『文治六年女御入内和歌』の入内屏風和歌において、兼実、季経、隆信の三歌人が、内侍所御神楽について詠んだ和歌で、月を表すのに「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語を用いた背景には、内侍所御神楽の祭祀の対象が八咫鏡であるという理解があったためと考えられる。

ここから想像を逞しくするならば、彼らは神楽歌「明星」で歌われる「今宵の月」の語に、天体の月のみならず、祭祀の対象である八咫鏡を見ていたかもしれない。ただし、これらはいくまでも神楽歌「明星」を題材に詠まれた和歌についての考察から得られた推論であり、即神楽歌「明星」の詞章の理解や解釈に適用するのは拙速である。また、神楽歌「明星」を題材とする曲でも、月を「ますかがみ」、「やたのかがみ」と表現する和歌は『文治六年女御入内和歌』の「入内屏風和歌」にしか見られず、このような解釈は、たとえあったとしてもごく限られ

た範囲にとどまっていた可能性がある。しかし、一方で、このような解釈が平安末期の歌人の間にあった可能性を見過ごしてもならないだろう。少なくとも、入内屏風和歌で、「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語を詠みこんだ三歌人は、内侍所御神楽で歌われる神楽歌「明星」で歌われる「今宵の月」に、御神楽の祭祀の対象である八咫鏡を重ね合わせていたのではないだろうか。

これらに加え、隆信集所収歌や女御入内和歌所収歌等からは、当時の歌人には、神楽歌「明星」は、月と明星とが明け方の空に同時に出ているさまを歌っていると解釈されていたこと、神楽歌「明星」の詞章には御神楽の名残を惜しむ気持ちが込められていると理解されていたこと等を指摘した。これによって現在の神楽歌「明星」の解釈の通説が、当時の歌人たちの解釈から大きくかけ離れたものではないということが確認されている。

#### 四、おわりに

以上、神楽歌「明星」の曲の解釈を確認し、同曲を題材として詠まれた平安期から新古今集までの和歌から、当時の歌人たちに同曲がどのように解釈されていたか、そして、同曲の詞章の解釈として何が指摘できるかについて考察した。

御神楽が成立し、盛んに行われた平安時代、新古今集までに、神楽歌「明星」を題材として二十六首の和歌が詠まれた。平安時代に詠まれた和歌の総数を考えればわずかな数だが、和歌に題材として詠まれる歌謡の数は多くはない。神楽歌に限定すれ

ば数えるほどである。これらの二十六首には当時の人々の同曲に寄せる興味がうかがえるといつてよいだろう。ならば、これらの和歌を解釈することで、そこから当時の歌人たちの同曲への解釈を読み取ることは可能である。

本稿では特に「明星はくはやここなりや何しかも今宵の月はただここに坐すや」の箇所の解釈について詳細に論じることとなった。この中で、「今宵の月」は実際に御神楽の場に出ている有明の月を指し、当該歌の詞章は空に明けの明星と月が出ているさまを歌っているとする現在の通説は、平安後期から末期の歌人の解釈にも通じることが確認できた。さらに、平安末期の歌集『隆信朝臣集』の和歌と詞書からは、神楽歌「明星」の詞章は「暁の別れに對する名残惜しい気持ちを示している（三十五）」という池田弥三郎の説と同様の解釈が確認された。本稿での考察は、これらの通説に對する一つの証左を示し得たといえる。

さらに、「明星」を題材とする和歌の歌題についての検討からは、平安後期から末期にかけて、ある範囲の貴族の間で、「明星」の曲は内侍所御神楽と関係の深い曲として認識されていた可能性を指摘した。

また、神楽歌「明星」を題材にする和歌の表現面については、これらの和歌には「今宵の月」や「ただここに」等、題材となった神楽歌「明星」の詞章からことばを引く例があること、「月」や、「ますかがみ」、「やたのかがみ」といった月を表す語も、神楽歌「明星」の詞章の「今宵の月」を指していると考えられること、さらに、『文治六年女御入内和歌』の「入内屏風和歌」における内侍所御神楽を詠んだ和歌に見られる、月を「ますか

がみ」や「やたのかがみ」の語で表現する背景には、同神楽の祭祀の対象が八咫鏡であるという共通理解があったと考えられること等を指摘した。

また、入内屏風和歌における内侍所御神楽を詠んだ和歌で、月を表す語として「ますかがみ」、「やたのかがみ」の語を用いた兼実、季経、隆信の三歌人は、内侍所御神楽で歌われる神楽歌「明星」の詞章の「今宵の月」に、御神楽の祭祀の対象である八咫鏡を重ね合わせていた可能性があることを指摘した。だが、これについては推測の域を出ない。また、これはあくまでも和歌の表現とその解釈からの指摘であり、神楽歌「明星」の詞章の「今宵の月」が直接八咫鏡を指しているとは言い難い。ここでは解釈の可能性の指摘に留めたい。

和歌から得られる解釈や理解を即歌謡の詞章の解釈に適用することは危険である。しかし、一方で歌謡と和歌の親和性は再度述べるまでもない。このように歌謡を題材に詠んだ和歌を詳細に見ていくことで、当時の人々の歌謡に對する興味や解釈、その背景を知ることができるのである。

#### 〔参照資料〕

○神楽歌の平安期写譜本

参照した歌謡譜本と各底本は以下の通りである。

『神楽和琴秘譜』

……陽明文庫編 陽明叢書国書篇第八輯『古楽古歌謡集』一九

五八年九月 思文閣出版

信義本『神楽歌』・重種本『神楽歌』

……官幣稻荷大社複製一九三一年二月

鍋島家本『東遊歌 神楽歌』

……古典保存会複製 一九三八年八月

○一条兼良『梁塵愚案抄』・熊谷直好『梁塵後抄』

高野辰之編『日本歌謡集成』改訂版 卷一 中古編 一九六〇年七月

東京堂出版(私に適宜濁点・句読点を付した)

○賀茂真淵『神遊考』

国学院編輯部編 賀茂百樹校訂『賀茂真淵全集』第二 一九〇三年

十一月 弘文館

○本居大平『神楽歌新釈』

本居豊穎校訂『本居全集』第六(本居春庭 大平 内遠 全集) 一九

〇三年二月 吉川半七ほか発行

○橘守部『神楽歌入文』

橘純一編 久松潜一監修『新訂増補 橘守部全集』第七一九六七年

九月 東京美術

○萬葉集

佐竹昭広ほか『増補版万葉集本文篇』一九九八年二月 塙書房

訓読は、小島憲之ほか校注訳 新編日本古典文学全集6〜9『萬葉

集』①〜④(一九九四年九月〜一九九六年八月 小学館)を底本と

し、佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集』一〜十八(一九九四年三月〜

一九九四年十二月 岩波書店)、廣瀬捨三ほか編『校本萬葉集』別

冊一〜三(一九九四年九月〜十一月 岩波書店)を参照した。

○他の和歌や歌集についての解説は、とくに断らない限り、『新編国

歌大観』CD-ROM 版 Ver.2、『新編国歌大観』編集委員会監修 二

〇〇三年六月 角川書店ほか)によった。各歌に付した歌番号は同

書による。

○類聚名義抄(観智院本)

天理図書館善本叢書 和書之部編集委員会編 天理図書館善本叢書

和書之部第三十二〜三十四卷『類聚名義抄観智院本』佛法 僧一

九七六年九月〜十一月 八木書店

○倭名類聚抄(二十卷本)

京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』本文

篇(一九六八年七月 臨川書店) 真福寺本による。

○江家次第

渡辺直彦校注『神道大系 朝儀祭祀編四 江家次第』一九九一年三月

神道大系編纂会

○中右記

増補「史料大成」刊行会著 増補『史料大成』9・10(中右記一・

二) 一九六五年十月 臨川書店

○梁塵秘抄口伝集

佐佐木信綱校訂『新訂 梁塵秘抄』一九四一年七月 岩波書店

○體源鈔

正宗敦夫編 日本古典全集『體源鈔』一—四 一九三三年四月—十

一月 日本古典全集刊行会

[注]

(一) 拙稿『古今和歌六帖』所収の平安期歌謡について(『国語国

文』第七十八卷第九号 二〇〇九年九月 中央図書出版社)

(二) 拙稿「神楽歌「杵」の歌詞の異同とその解釈——平安期写譜

本と古今和歌集・古今和歌六帖を対象に——」(『京都大学国文学

論叢』第二十三号 二〇一〇年三月 京都大学大学院文学研究科

国語学国文学研究室「国文学論叢」編集部)

なお、同稿では、米山敬子氏の「論文、「採物歌」「杓」の歌詞の変遷について」、『日本歌謡研究』三十二号 一九九二年十二月 日本歌謡学会)、「□さぶ」考——「水さびにけり」の解釈のために——(『関西外国語大学研究論集』五十七号 一九九三年一月 関西外国語大学院院生研究会)を先行研究として参照すべきところ、見落としておりました。論の発表後さまざまにご教示いただきましたこと、心より御礼申し上げます。

- (三) 白田甚五郎ほか校注訳 新編日本古典文学全集42『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』二〇〇〇年十二月 小学館  
(四) 小西甚一ほか校注 日本古典文学大系3『古代歌謡集』一九五七年七月 岩波書店

(五) 以後の御神楽の歌謡群の大別とその役割については、志田延義『日本歌謡圏史』(一九五八年四月 志文堂)によった。

- (六) 前掲四 小西甚一ほか校注 旧大系 三四〇頁 頭注  
(七) 三浦佑之「吉々利々」考『成城文藝』第七十五号 一九七五年十一月 成城大学芸学部) 四一〜四三頁  
(八) 前掲七 三浦佑之「吉々利々」考 四五、四九頁  
(九) 前掲七 三浦佑之「吉々利々」考 四五頁  
(十) 千秋季隆述『謡物評釈 神楽歌評釈』(一九〇五年 早稲田大学出版部。国立国会図書館の近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/BIBIDetail.php?i=11011> 一年二月十八日閲覧)、大竹貞治『神楽・催馬楽通釈』(一九三五年五月 大同館書店)、西角井正慶『神楽歌研究』(一九四一年五月 畝傍書房)、池田弥三郎ほか編 鑑賞日本古典文学 第4巻『歌謡I』(一九七五年五月 角川書店)、前掲三 白田甚五郎ほか校注訳 新全集。  
(十一) 前掲十 西角井正慶『神楽歌研究』

東方に暁星が出たのに、月は何でそのまゝ此処(西の方)にをられるのだと、明星と月と相対した位置にみるのと、後抄の様に「今夜あるべくもなき月が何の為に此処にあるのだ」と、月の如く照り輝く明星を斥して言ったとすると、何れが面白い。鑑賞の問題である。只神楽の時期が霜月の中頃として、一夜照り渡った月が西の端に光り納まる頃とすれば、前者でよい様に思ふ。

- (十二) 前掲三 白田甚五郎ほか校注訳 新全集 七六、七七頁脚注  
(十三) 前掲四 小西甚一ほか校注 旧大系 三四一頁頭注  
(十四) 前掲十 千秋季隆述『謡物評釈 神楽歌評釈』一〇四頁  
(十五) 前掲十 大竹貞治『神楽・催馬楽通釈』一一四頁  
(十六) 前掲十 池田弥三郎ほか編 鑑賞日本古典文学 第4巻『歌謡I』二七三頁

(十七) 一つの空に同時に月と星が出ているさまを詠む例として、次のような和歌がある。

100 ひさかたのそらなるほしにたくはずはひるとぞ見ましあきのよの月

二四 (江帥集(匡房) 秋 宇治殿の扇合の歌左方) すみのぼる月の光やまさるらんひまなき星の見えず成行

く (中宮亮頭輔家歌合 月十二番 右 詠人不知) 秋はなほあまたのほしのみえぬまでいかでひとつの月て

101 らすらん (右衛門督家歌合 久安五年 一番 秋月 左右衛門督家成)

- (十八) 前掲三 白田甚五郎ほか校注訳 新全集 七六頁  
(十九) 前掲十 池田弥三郎ほか編 鑑賞日本古典文学 第4巻『歌謡I』二七三頁

(二十) 神楽歌「明星」を題材として詠まれた和歌の存在については、

勝俣隆史「金星と国文学と人間と (B) 明けの明星」(『国文学談話会報』二十四 一九七八年十月 静岡大学人文学部国文学談話会)に数首が指摘されているほか、平成二十二年度日本歌謡学会春季大会(二〇一〇年五月十六日 南山大学)において、菅野扶美氏がご発表「神仏へ向かう歌——神楽から今様で」の中でご指摘になった。氏は、ご発表の中で、これらの和歌には「こゑ」への注目が見られることについても触れられている。このご発表については、近々ご論文としてご発表のご予定とのことである。

また、菅野氏にはご発表後、さまざまに「ご教示いただいたこと」を心より御礼申し上げます。

- (二十一)『新編国歌大観』編集委員会監修『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2 (二〇〇三年六月 角川書店)を用い、「星」or「ほし」or「ぼし」で検索 成立年代順に並び替え、『新古今和歌集』までの和歌で星を詠んだものを数えた(漢詩、判詞等に含まれるものは除く)。延べ数で四七三首。このとき、たとえば「夕星(ゆふづつ)」等の語は漢字表記の場合は計数され、ひらがな表記の場合は数に入っていないが、考慮していない。
- (二十二) 前掲二十一の検索結果のなかで、「明星」、「明ほし」、「明ぼし」、「赤星」、「赤ほし」、「あか星」、「あかほし」、「あかぼし」の語を含む和歌を数えた。
- (二十三) 近藤みゆき「古今和歌六帖の歌語——データベース化によって見た歌語の位相——」(小町谷照彦ほか編『歌ことばの歴史』一九九八年五月 笠間書院)
- (二十四) 熊谷直春「古今和歌六帖の成立」(二〇〇五年五月「文芸と批評」第十巻題一号 文芸と批評の会)に詳細にまとめられている。この論では、後藤利雄「古今和歌六帖の編者と成立年代

について」(『国語と国文学』一九五三年五月 東京大学国語国文学会)、平井卓朗「白氏六帖を媒介としての古今和歌六帖私考」(『国語と国文学』一九五五年七月 東京大学国語国文学会)の両論を改めて検証し、六帖の成立時期を貞元元年(九七六)から永観元年(九八三)の七年間まで絞り込んでいる。

(二十五) 一九 あまのがはなみまにみゆるあかほしはくもまに  
うかぶほかげなるべし (賀茂保憲女集)

(二十六) 二〇三 あかほしのあまたみゆるはこのまよりともしの  
かげのまがふなりけり

二〇七 あかほしのひかるかとのみみえつるはたかしのや  
まのともしなりけり (為忠家初度百首 夏 曉更照射)

(二十七) 一九 あかほしのかげをともにてやまのはをよぶかくい  
づるほととぎすかな (為忠家後度百首 郭公十五首 曉郭公)

(二十八) 神楽歌「明星」の詞章を典拠とする和歌については、前掲二十一『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2を用い、神楽歌「明星」の曲の詞章に含まれる語で検索、内容を精査した。また、御神楽の場における「星(ほし)・「明星」・「あかほし」を詠んだ和歌については、前掲二十一の検索結果の内容を精査し、抽出した。

(二十九) 入内屏風和歌の二六五番歌(兼美)は、後に『玄玉和歌集』巻第一「神祇歌」に採られており、その際の詞書に「同じ」(「中宮月次の」稿者注) 御屏風に、神楽したる所をよませ給ける」と見える(四三番歌)。

(三十) 三五六 いほつつのやたの鏡のはれければ物おもふ身のかけも  
さやかに (宝治百首 恋二十首 寂能)

(三十一) 例えば、「春宮践祚あり。(略)内侍所、神爾、宝剣わたし

奉る」(『平家物語』巻第四「厳島御幸」。市古貞次校注訳 新編  
日本古典文学全集 45『平家物語』一 一九九四年六月 小学館)。

「内侍所は、笠置の本堂に捨て置き奉りしかば」(『太平記』巻第  
三「六波羅北方皇居の事」。長谷川端校注訳 新編日本古典文学  
全集 54『太平記』一 一九九四年一〇月 小学館。[Naniidocoro.

ナイシドコロ(内侍所) 内裏(Dairi)の或る立派な鏡の名。Saij  
no jingui(三種の神器)と呼ばれる、日本の立派な宝物三つのう

ちの一つ。』(『邦訳日葡辞書』土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』  
一九八〇年五月 岩波書店)。

(三十二) 前掲三 白田甚五郎ほか校注訳 新全集 七六頁

(三十三) 前掲十 池田弥三郎ほか編 鑑賞日本古典文学 第4巻

『歌謡I』二七三頁

(三十四) 財団法人陽明文庫編 陽明叢書国書篇第八輯『古楽古歌謡

集』一九七八年九月 思文閣出版 『神楽和琴秘譜』解説 二一  
宮廷御神楽の種類」土橋は、『江家次第』の内侍所御神楽二種と、

大嘗会、賀茂臨時祭の条を挙げ、賀茂臨時祭の「次第は前記の内

侍所の御神楽とほぼ同じであるが、「星」のないことが注目され  
る。さきにあげた二種類の内侍所御神楽の次第のうち、Aの方に  
「星」がないのは、内侍所御神楽も最初は賀茂の還立御神楽と同  
様「星」がなかったが、後に「星」が加えられたことを示すもの  
であろう」と指摘した。

(三十五) このように内侍所御神楽における「明星」の曲のみが取り  
上げられる理由の一つとして、前掲三十三の土橋寛の指摘が挙げ  
られる。氏の指摘はつまり内侍所御神楽の曲や次第が整えられて  
いく過程において「明星」の曲を含む「星」が加えられたという、  
御神楽の次第の時代的変遷について指摘している。氏の指摘のよ  
うに、このような御神楽成立の過程から、内侍所御神楽における  
「星」が『江家次第』や『中右記』でとくに記述されたという可  
能性は充分考えられる。

(三十六) 前掲十 池田弥三郎ほか編 鑑賞日本古典文学 第4巻『歌

謡I』二七三頁

(たばやし ちひろ・本学非常勤講師)